RCRC
Red Cross Red Crescent
マガジン日本版　Issue 4・2015

新しい時代の新しい勢力

自財政難の真っただ中で移民問題に直面するキプロス。問題の解決に向けて赤十字社が動き始めた

遺体の身元を特定する仕事

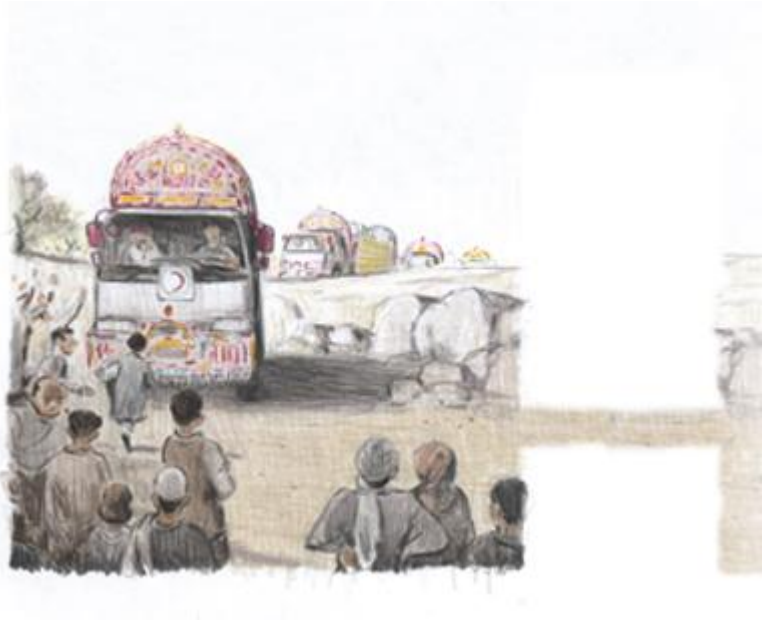
40年前にICRCの訪問を受けた拘留者が今、真実を探している

赤十字基本原則の問題点

人道
公平
中立
独立
奉仕
単一
世界性

「赤十字基本原則」の問題点

「赤十字基本原則」が定められてから、ちょうど 50 年が経った。今こそ、指針の要ともいうべき基本原則をもって、目の前の課題を検証する時なのではないだろうか？



まず、次の状況を想像してほしい。あなたはパキスタンのバロキスタン州の村落で、深刻な洪水の後、ボランティアとして食料を配布している。群衆がよく聞こえるように、食料の小包でいっぱいのトラックの上に立って説明しなければならない。すると突然、銃声が近くで鳴り響く。あなたは驚き、動揺するだろう。ふと気が付くと、目の前に銃が突きつけられている。

これはまさに、パキスタン赤新月社のボランティアが置かれている現実だ。この状況は実際に、サボール・アーメド・カカルと彼のチームが、洪水の被災地域でトラックから配給品を下ろそうとしたときのものだ。この経験は、カカルにとって転機だった。これがきっかけで彼は、その作業が赤十字・赤新月社の活動の中でどのような意味を持つのか、基本原則に基づいて努力することがいかに難しいか、不十分な解決策しかない中でどのように決断すればいいのか、といった難しい選択と向き合うことになったのである。

基本原則について

マリク・アブドゥル・ハキムは、基本原則の「中立」と「人道」が、人の苦しみをいかに緩和できるかを示す生き字引だ。最近ニューヨークタイムズで特集されていたように、ハキムの主な職務は、戦闘で亡くなった人々の遺体を愛する家族のもとに送り返すこと。アフガニスタンの紛争の際も、敵・味方関係なく、どんな立場の人々の遺体であっても、彼はこの職務を遂行した。

2015 年1月 5 日号の記事で、ニューヨークタイムズの記者、アザム・アーメドは次のように書いている。「彼は、タリバン占領区域で殺害された軍人や警察官の遺体を収集し、自宅に送り届けている」「彼は、道端に爆弾が点在している道路をうまく通り抜け、殺害された反乱者の遺体を中央政府から家族に引き渡している」

彼にそんなことができたのは、アフガニスタン赤新月社に在職中、戦争で荒廃した国で、政治的・軍事的な戦闘のどちら側にもつかなかったことにより、中立的であるとの評価を得ていたからだろう。「中立」は、赤十字・赤新月社の 7 つの基本原則のひとつで、危機に瀕している人々への支援活動において重要な手段である。

対話を求める赤十字の大規模な取り組み

これらの基本原則――人道、公平、中立、独立、奉仕、単一、世界性――は、赤十字が世界中で活動することを可能にし、さらに、あらゆる信条を持つ人々が赤十字・赤新月社の人道的な目的を理解し、信頼できる啓発的な言葉、あるいは指針・方法論として機能する。7原則を採用してから 50 年が経過した今、その活用の可能性を探ることは、以前にもまして重要かつタイムリーなものとなっている。

というのも、1965 年以来、7 原則の中で「人道」の領域が劇的に広がり、多様化してきたからである。事態は、赤十字運動と少数の主要な組織が人道支援の大部分を担っていた時代とは、全く異なる。今日では、何千という組織が、さまざまな活動原則のもとで多様な支援を繰り広げている。特にここ何十年では、支援が、地方住民の心を勝ち取るための開発プログラムや軍事行動とセットとなった政治的道具として使われることも多々あり、人道活動を効果的にする基本的な原則が、疑いや拒絶の対象になるといった事態を引き起こしている。

特に、政治色の濃い、あるいは危険な環境下では、原則を適用することで新たな問題も生じている。赤十字のボランティアやスタッフ、指導者は日々、基本原則が重要な役割を果たすような、厳しい意思決定の場面に直面している。

「今日の人道活動において、基本原則の妥当性についての理解をより一般に広める目的のもと、包括的で建設的な対話・議論をする」ことで、基本原則の理解を再び確固たるものにしようと、2013 年以降、赤十字は幅広く取り組むようになった。

具体的には、ムーブメントやオンラインセミナー内の、パブリック・フォーラムやディベート、地域ワークショップの他、5 月 8 日の世界赤十字デーや、10 月の基本原則の制定 50 周年記念の促進キャンペーンを通して、対話が生まれてくるだろう。いずれも、12 月の第 32 回赤十字国際会議につながっている。その会議の間、議論と行動の主なテーマは「基本原則」となるだろう。

今回の記事は、ボランティアが基本原則に関係する厳しい選択に直面した際のエピソードで始まっているが、ボランティアがそのとき直面したジレンマについて、経験豊かな人道支援者の考えを聞いた。

ジレンマが生まれた日

カカルは 2009 年、ダマニ・ダムが決壊する1年前に赤十字社の活動に参加した。彼は、経験豊かな熟練のボランティアだったが、冒頭で紹介したエピソードは、彼が食料供給のチームリーダの番となった日に起こった。赤十字の支部は、食料を配る前に地元の役人と連絡を取り、供給の段取りを話し合った。このような場合によくあることだが、彼が食料をいっぱいに積んだ 25 台のトラックとともに目的地に着くやいなや、喉から手が出るほど待ち望んでいた食料を受け取ろうと、人々が群がった。

しかし、荷物を下ろしていると、1 人の男が近づいてきて地元のリーダーだと名乗り、「最も助けが必要な人を知っているので、貨物を自分に引き渡して食料を分配させてほしい」と頼んできた。そうすれば、予定されている地元の選挙で彼が勝利する確率は高くなるからだ。

カカルは、この要求を受け入れれば、特定の人々の要望や個人のコネが優先されることになり、公平の原則を損なう可能性があるということを知っていたので、公平の原則と、今後も地元リーダーがボランティア活動を妨げる可能性との間のジレンマを強く感じた。

カカルの決断

最終的にカカルは、その脅迫はあくまで可能性にすぎないとして、公平さを優先させる決断をした。そもそも公平の原則を破れば、人道の原則とも矛盾してしまう。なぜなら、最も食料を必要としている人々が受け取れないかもしれないからだ。

そこで彼は、その男に「私はリーダーとしてあなたを尊敬しています」と伝えた。「そして、私たちにとって非常に大切な方です。それでも、この食料をあなたに渡すことはできません。それは食料分配における私たちの原則と方法に反しているからです。もし、あなたが洪水の犠牲者なら、もちろん私たちはあなたの要求に従い、あなたの家族にできる限りの支援をするでしょう」

男は自分の部下に、トラックを奪い取るよう命令したが、村の人々はそれを阻止する側に加わった。男は、人々が味方してくれないとわかると、ボディガードに指示して空砲を打たせた。一方カカルは、村人によって、それ以上の危険を被らずにすむようトラックに放り込まれた。村人たちは、狙撃者と闘って鎮圧し、男を警察に引き渡した。

こうして、カカルと彼のチームはさしあたり危機から脱したかに見えたが、彼らの安全は保証されたわけではない。それゆえ、チームは2度目のジレンマに直面した。そこに留まって食料を供給すべきか？それとも、村や地元のリーダーが「人道支援者は安全である」と約束できるまで、その場を離れるか？たとえ基本原則に則って首尾よく荷卸しができたとしても、今後もまたここに食料を届けることはできるのだろうか？

結局、支部のボランティアは、通常の手続きに従って食料を配ることができた。ただ、いったん支部に戻って、先ほどの事態について議論する必要があった。当初、彼らはこれ以上の分配は見合わせようと考えた。「一度でもそのような事件があった以上、これ以上そこで働きたいとは思いません。私たちの安全の方が重要なのですから」

しかし、不気味に迫る脅威の中で、カカルが赤新月社に参加した理由である「人道」の原則が、彼の良心へと強く働きかけた。結果、最初の考えを撤退することにしたのである。「私たちは全力を尽くすことにしたのです」「私の使命は人々を助けることであって、置き去りにすることではありません」

ボランティアたちはこの意見に賛同し、職員スタッフに配送を再開するよう要請した。「私がこのように働くことができるのは、同僚の勇気と献身のおかげです」「私たちは全部でおよそ 35 人いますが、誰もが基本原則を守ると誓っています。今回の事件はメディアに掲載され、私たちの決断は、国際社会と赤十字社の地方支部に支持されました」

ジレンマ：あなただったら、どうしますか？

基本原則を実行に移すとき、各々の事情の中でどのようにそれを受け入れるかについて、明確な答えが必ずあるというわけではない。全体像を得るために、私たちは経験豊富な人道支援者に、カカルがその日直面したジレンマについての見解を尋ねてみた。

ファディ：シリア赤新月社ボランティア

私だったら、カカル氏を襲った地元のリーダーに、こう言うでしょう。「あなたの人道主義者的な思いに大変感謝します。ただ、あなたは貧しい人たちがどこに住んでいるのか知らないでしょう。私たちは彼らをデータベースに登録し、彼ら自身から情報を入手しなければならないのです。それにはとても時間がかかりますから、私たちに任せてください」特に戦時下では、あらゆる団体と同じ距離を保ちながら付き合わなければいけません。なぜなら、あなたが救援物資を与えた地元リーダーが特定の立場を代表していたら、それと反対の立場にある人々は、あなたが中立的な立場であることに疑念を抱くからです。使命を果たすためには、どんな立場の人にも信用されなければならないのです。

トーレ・スヴェニング：赤十字常置委員会事務局長

食料は、自分で分配するべきです。情報はすべて検証しなければなりません。それには大変な時間がかかるので、我慢を強いられることもあるでしょうが、長い目で見ると、信頼関係の構築には効果的なのです。

サラム・コルシド：シリア赤新月社、連盟青少年委員会メンバー

地元リーダーに食料を与えれば、公平性を損なうことになるでしょう。私なら、彼の申し出を外交的な手法で拒絶するでしょうね。まず人々の欲求を重視し、その上で、彼らが欲求に従って供給品を得ているのかどうか、確認しなければなりません。この種の申し出を受け入れてしまえば、人々の信用も失うことになるでしょう。あらゆる救援活動において、すべての国際社会がこの種の困難に直面すると思います。ですから、いつでも可能な限りの最高のサービスを供給できるよう、外交関係を築いておく必要があります。

イブ・ダコー：赤十字国際委員会事務局長

これは危険な状況ですが、私だったらこう言います。「最も支援を必要としているのは誰か、見極めなくてはいけません」私の場合、何らかの方法でリーダーたちに、支援物資を分配するよう頼むかもしれませんが、それはその支援を誰に届けるか決めた場合に限ります。その方法がうまくいくかどうかはわかりませんが、とにかく交渉を試みるでしょう。そしてもし「できない」と言われれば、分配をやめるよう伝えるまでです。

（文：Ismael Velasco。英国に拠点を置く非営利団体、アドラ連盟の CEO。）

このようなジレンマに直面したら、あなたはどうしますか？

エボラ出血熱との闘いにおける「中立」と「独立」

リベリア赤十字社のエボラ出血熱調整員ネイマ・キャンデイは、「エボラ出血熱発生の初期段階で、リベリア赤十字社が“安全かつ尊厳のある埋葬”を引き継いだとき、中立性の維持と赤十字マークの使用はスムーズにいきませんでした」と語る。「保健省からこの仕事を引き継いだとき、安全上の理由から、軍の護衛を付ける方針も引き継がなければなりませんでした」

これによって、彼女のチームは深刻な影響を受けることになった。なぜなら、暴力や武力衝突がある地域においても、赤十字・赤新月社のスタッフやボランティアは、赤十字の基本原則である「中立」と「独立」に反するという理由で、警察や軍の護衛を付けないことになっているからである。この原則は、赤十字関係者が政治的にも軍事的にも中立の立場を維持し、純粋な人道支援を行っていることを示すためにあるのだ。

「ただ、政府の方針を勝手に変えられないということが難点でした。“安全かつ尊厳のある埋葬”は政府の管轄下で実施されており、私たちは当時、活動を支援する立場だったので、すぐに方針を変えることはできなかったのです。そのため、車両に赤十字マークを付けることができませんでした。これにより、外見的には赤十字の人間でない私たちは、赤十字の中立性を理解している地域社会においてすら信頼を得ることができず、攻撃を受け続けることになりました」

「リベリアでは、赤十字社は 1999 年～2003 年の内戦中に埋葬の活動を行ってきたので、長期的に地域社会の信頼を得ることができています。当然、住民は私たちが埋葬の活動を行うと知っています。しかし彼らは、私たちが赤十字社のスタッフであることも中立的立場にあることも見た目では判断できなかったため、政府・保健省に対する不信やエボラ出血熱の噂と相まって、私たちに対しても不信感を抱き、埋葬の活動を拒否するようになってしまったのです。地元の人たちは、こう言っていました。『あなたがたは赤十字のメンバーだと言いますが、どこにも赤十字マークを付けていないじゃありませんか』と」

「地域の人たちと衝突することもありましたが、そのときは衝突そのものだけでなく、感染に対しても心配しなくてはなりませんでした。なぜなら、彼らが遺体に触れた手でボランティアと接触したりすれば、感染によって大混乱になる可能性があるからです」

こんなとき、あなたならどうしますか？　どのようにして地域の人たちに、自分たちが中立的立場にあることを信用してもらい、警察の護衛を付けずに赤十字標章のもとで活動することを認めてもらうでしょうか？

警察護衛によって生じるジレンマについて、キャンデイは次のように話す。「私のチームはこの問題について、2つの角度から考えました」「まず、地域の人たちに、私たちが赤十字のスタッフであることと、赤十字社標章を使用しない理由を知ってもらわなければなりませんでした」彼女は続ける。「特に、抵抗を受けた地域で社会動員の努力を増やしました。また、遺体回収の理由や、家に遺体を残しておくことの危険性、またいかに体液との接触を避けるべきか、などについて意識を高めてもらいました。そして、たとえ私たちの車が赤十字マークを付けていなくても、赤十字の人間であると認識してもらうよう、お願いしました」

「次に、警察との交渉について考えました。最初、彼らは私たちに同行すると主張しました。しかしその後、いろいろ協力を進めていく過程で、護衛なしで遺体回収を行う試みの提案をしました。赤十字標章さえ付けていれば人々に抵抗されることもないとわかると、警察も護衛の中止に同意してくれました。当然、私たちの責任は増えましたが、徐々に警察との関係も改善され、最終的に政府の方針も変えてもらえるようになりました」

「”中立“は、意思決定において最も重要な要素です。しかし、私たちは赤十字のバックグランドのない政府のチームを引き継いだので、彼らに我々の基本原則”公平“について理解してもらえるよう努力をしなければなりませんでした。例えば、彼らの地元で収容する遺体があるという連絡を受けても、すでに予定されている収容の方を優先しなければならない、ということを教育するのは大変でした」

地域レベルでの「中立」

「ベリーズでの支援活動中にたびたび直面するジレンマは、大なり小なり人道的活動に対する政治的干渉です」と、ベリーズ赤十字社事務局長のリリー・ボウマンは話す。「これは、地域社会の人々の間の不公平の原因になると同時に、長年続く緊張と衝突の原因にもなります」

「ベリーズ赤十字社が北部ベリーズの8つのコミュニティで“アメリカ再生プロジェクト”を開始したとき、プロジェクトのメンバーは当初、政治的に分断された人々とともに働くという難問に直面しました。そうした状況は、私たちの組織の中立的活動を妨げるものでした。受益者を選定する場合にも、一方のグループの人たちと話をすれば、そのグループの中から選ばねばなりません。一方で、政治的に対立する他のグループと話をすれば、また同じことが起こります。弱者優先とか必要性という観点は全く考慮されないのです」

「しかしながら、中立的立場を貫くには好き嫌いがあってはならないし、政治的議論も避けなければいけません。例えば、サン・ビクターという村では、洪水による水質汚染対策として、高い場所にトイレを20 カ所作りました。ただし、高齢者や身体障がい者向けのものは低い場所に作りました。プロジェクトチームが活動を始めた当初、この村における政治的対立は深刻でした。多くの住民は、村内での交流を嫌っていました。緊張状態は逼迫しており、それは私たちの活動を妨げるほどでした」

こんなとき、あなたならどうするだろうか？　このような党派意識の強い環境下で、「中立」と「公平」の原則をどう守るのだろう？

ベリーズ赤十字社は、こういった地域社会の政治的分断を乗り越えて、創造性を発揮し、できる限りの活動を行った。政治的対立による緊張状態に対応するため、地域社会支援グループを複数組織し、地域の人たちの参加を募ったのである。

「これらのグループは、地域の人たちで構成されました。彼らは政治問題から離れて、地域社会を守り治安を維持する活動や、奉仕活動、さらには経済活動にも純粋に興味を示してくれました」とボウマンは語る。「たとえ彼らの政治的、宗教的、部族的背景が違っていても、彼らは地域社会の問題を解決するために共通のテーブルにつくことを望んだのです」

彼らには、赤十字社の7つの基本原則が紹介され、特に「中立」の原則に重きが置かれた。その上で、プロジェクトチームの指導のもと、すべての活動の意思決定のプロセスと討議にその原則を適用してもらった。その結果、政治的な違いを乗り越えて、トイレが本当に必要な人たちや最も立場の弱い人たちを全グループの中から選び出し、リストを作ってもらうことができた。このグループはまた、若者たちの経済状況を改善するプロジェクトにおいても同様のプロセスを踏んだ。ボウマンは言う。「中立については他のコミュニティでも課題でしたが、この例をモデルとして活動した結果、非常にうまくいくようになりました」

赤十字の名のもとで宗教的資料を配布するということ

デンマーク赤十字社のスタッフであり善意大使でもあるトーブジョーン・ペダーセンは、最近、「中立」と「公平」の原則に関する難しい局面を体験した。彼は今、飛行機を使わずに世界各国を旅しているが、旅の途中で各国の赤十字社を訪問し、その体験をブログにのせている。

「ある日私は、いつもあたたかく迎えてくれる、ある赤十字社を訪れました。たまたまそこで行われた赤十字青年部向けリーダーシップ研修会に招かれたのです。教室では、他の参加者と同じ資料を渡されました。驚いたのは、その資料の中にキリスト教福音派の勧誘のパンフレットが入っていたことです。教室を見渡すと、もちろん他の参加者の机の上にも同じパンフレットがありました。これは、私の理解する限り基本原則に反するものですから、大変怒りを覚えました」

「私は講義中、あえて何も言いませんでしたが、あとで赤十字青年部のリーダーと2人になったとき、その宗教パンフレットの問題を指摘しました。すると彼は、その問題には気付いていたと言ったのです。しかし、その先生は大変いい人で、長年赤十字青年部の教育をボランティアで引き受けてくれており、しかも講義中に宗教の問題を取り上げることもないため、パンフレットを置いたのだということでした。自分はゲストだという認識もありましたが、リーダーに、これが問題であるという認識があるのかどうか、慎重に聞いてみました。すると彼は、ただうなずいて肩をすぼめるだけでした。個人的には、今後もその教育者を擁するべきであると考えますが、赤十字社の名のもとでの研修の際に、直接関係のないパンフレットを配布してはならないということを、本人に伝えるべきだと思います」

（文：Anita Dullard。IFRC のコミュニケーション・スペシャリスト。）

厳しい時代に生まれた新しい勢力

東部地中海の大陸間に位置するキプロスは、財政難の真っただ中にもかかわらず増え続ける移民の問題に直面している。この問題の解決に最近参画し始めた組織が、赤十字社である。

キプロスで暮らす 38 才のシリア人男性、サミールは、がらんとした自室で、たった2つしかない家具の片方であるシングルベッドの端に腰かけ、この国の首都、ニコシアにたどり着くまでの事情を話してくれた。

「私はダマスカスで、妻と娘と 3 人で暮らしていました。私が家族のために食糧を探しに行っていた間に、住んでいたアパートの建物が爆破されたのです。妻と娘は殺されてしまいました」

彼は、身の危険を感じてダマスカスを去り、キプロスへ向かう前の数カ月間は難民キャンプで暮らした。彼は幸運にも戦争の恐怖から逃れることができたが、多くの移民と同じように、今は別の悪夢の中で暮らしている。というのも、警察の目を避けて仕事を探しながら日影で暮らすことを強いられるという、法的に曖昧な立場に置かれているからだ。

キプロスに流れ込んだシリアからの移民は、「補助的な保護」という資格を得ることで、自国へ送還されないことが保証される。しかしその資格を取得したからといって、不法入国したキプロスで生活することが正式に認められるわけではない。

サミールは、すでに 4 カ月間を拘置所で過ごしている。最初はニコシア中央刑務所、それ以降はラルナカの南東にある市に近い、移民専用のメノジア拘置所に収監された。「いつかシリアに送還されてしまうのではないかと不安です」と彼は言う。

彼は、正式な書類手続きを踏んでいない移民のため、キプロス政府の財政援助を受ける資格がない。身分証明を持たずに慌ててシリアを去ったため、政府当局に対して、難民あるいは亡命者の地位を獲得するのに役立つ身元を証明することができないのだ。

その上、日雇労働を見つけることすら容易ではない。本業はペンキ塗りだという彼がこの国にやってきたのは、2012 年末に頂点に達した全国的な金融危機で経済が完全に行き詰まり、その後遺症に国中が苦しんでいる最中だった。国民の多くが仕事や家の他、退職金や貯蓄まで失った。かろうじて一日食べていける分だけ預金を引き出すことができる人々もいるが、それは取り付け騒ぎを防ぐ銀行の政策のためだ。

一方で、財界人と政治家たちは、2013 年に百億ユーロの救済措置を受けたことで復興の兆しが見えてきているようだが、一般の国民は、快方の兆しなどほとんど感じられないままである。昨年、25 才以上の人々の失業率は 18 パーセントにもなり、25 才以下の失業率は 45 パーセント近くにまで達した。

さらに、個人ローンや住宅・事業ローンはほとんど底を突きかけていた。打撃を受けなかった人はいないだろう。特に、移民と高齢者（退職年金を失った多くの高齢者）は打撃をもろに受けた。

「私たちは毎日のように、ベッドの中で身動きができずに助けを求めている高齢者を見かけます」と話すのは、キプロス赤十字社のニコシア支部で活動するボランティア、レアス・コントスだ。彼女は、高齢者やシングルマザー、あるいは赤十字本社支部が食糧を配布していても取りに来ることができない人たちの家に電話をかけて、ほとんど毎日のように食糧や薬を届けている。

コントスはまた、見回りの途中で大勢の移民を見かける。多くは東ヨーロッパや中央アジアからの移民だが、中にはカメルーンやスリランカのような遠方から来ている人もいる。最も多いのは、シリアからの移民だ。

「人々がキプロスにやってくるのは、働き口があるように見えるからだけでなく、ヨーロッパユニオンの加盟国だからです」と、ニコシア支部の現場指揮官、ジョルジオ・フランティスは言う。ヨーロッパユニオンの加盟国では、食料や生活必需品、衣服、情報のほか、移民が新しい土地で生活するのに役立つものを手に入れることができるのだ。「移民の間では、キプロスは豊かな土地として認識されているようです。しかし、それも最近崩れてきています」

新しい動き、そして新しい課題

このような状況下で、キプロス赤十字社もさまざまな変容を経験している。その一つは、経済危機や移民の流入が問題になる中、2013 年 11 月に行われた総会で、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）に加入が許可されたことで生じた。

今日、キプロス国家は、残された数少ない全国規模の社会組織とともに、この国の増大し続ける責務を負おうとしている。この危機的状況は、フィリピンやスリランカで長く続けてきた国際的支援を中止させるほどに、深刻化している。

すでに難民と移民の救助活動を行っているキプロス赤十字社は、難民の保護を支持するとともに、難民のために立ち上げた仮設キャンプでも直接援助を申し出た。
（写真：©Cyprus Red Cross Society）

「私たちが今まで手がけてきたプロジェクトの多くは、海外で行われるものでした。それは、私たちに余裕があったからというだけでなく、地元にあまりニーズがなかったからでもあります」と話すのは、キプロス赤十字社の総務部長、タキス・ネオフィトウだ。「今は、地元のニーズに応えることに専念しています」全国規模の組織の一部が、金融危機によって自己資金を喪失したり、凍結されたことについて話が及ぶと、「個人の投資家からの寄付が激減したことで、私たちのプロジェクトのニーズはむしろ増えています」と付け加えた。

画期的な反響があったプロジェクトの一つに、3 大企業の支援を得て取り組んだ学校の朝食給食計画と、他の地域での救援活動資金確保のキャンペーンがある。これらのプロジェクトとそれに伴う資金調達活動によって、赤十字社が提供している食料の配布量は、ほとんど倍増した。

新しい勢力

「2 年前まで、赤十字社の活動範囲はもっぱら国内に限られていましたが、さまざまな危機に直面したことによって初めて、緊急態勢や勢力について意識するようになったのです」と話すのは、南部海岸にあるリマソル支部の支部長、ニキ・ハジトサンガリだ。
「キプロス赤十字社は、こじんまりした、典型的で伝統的なヨーロッパ赤十字の組織で、普段は献血キャンペーンを行ったり、血液を病院へ運んだり、老人ホームにお年寄りを訪ねたりといった活動が中心です。クリスマスには、恵まれない子どもたちにプレゼントを持っていったりもしました。私たちの仕事は、貧しい人々を助けることでした。それができたのは、キプロスがとても裕福な国で、貧しい人がそれほど多くなかったからです」

ところが今、リマソル支部は常に食料や衣服を配布している。その上、食料を保管するスペースが足りないため、保管場所を拡張する方法を求めて苦戦している。また、支部のロビーはエレベーターほどの広さしかないため、援助や情報、仕事の紹介を求めてやってくる膨大な数の移民たちを収容できるよう、スペースの拡張を進めている。リマソル支部の会計担当、アニー・ハラキは、「私たちは緊急態勢で取り組んでいます」と話す。

緊急態勢

2014 年の 9 月になって、リマソル支部は、近年最大の緊急事態の一つに直面した。345 人のシリア人とパレスチナ人の移民が、暴風雨の吹き荒れる海上で客船に保護された際、船が入港したリマソル港で、支部は支援のための動員をかけた。移民集団が到着する前に、ニコシア支部のスタッフは、政府が管理する近隣の移民用キャンプでテントを設営し、支援物資の配布センターを設立するために、3日交替で働く追加のボランティアを招集した。

その際、キプロス赤十字社のボランティアたちは、移民にとって最低限必要なもの（衣服、靴、衛生用品、個々の看護用品、子どものためのおもちゃ）の他、応急処置用品や精神的サポートも提供した。さらに、本国や他の土地にいる家族と連絡が取れるよう、手助けもした。そして、その後数週間にわたって、移民の生活の質を向上させ、子どもへの学校教育や大人への英語学習を充実させ、弁護士の助言や紹介などを受けやすくするために、活動家を組織した。

それでも、行政機関がキャンプでのサービスの受け入れをすべて中止した1月の時点で、およそ 100 名の移民がキャンプ内に留まっていたため、ボランティアたちは彼らに対するサービスや薬品、必需品の提供を続けた。キプロス赤十字社のある医師は定期的に往診したし、赤十字社自体も2カ所の病院へ（もちろん許可を得た上で）患者の移送を行った。またスタッフやボランティアは、移民相手の密輸業者や、移民たちの弱い立場を利用しようとする業者から、彼らを守るための情報を提供した。

このようなエピソードからは、緊急事態に対応する赤十字の能力や、中立・独立・人道主義を旨とする組織の任務の質が見えてくる。それが特に顕著なのは、政府の諸機関から、移民にとって最善とはいえない政策を強要されたときだ、とネオフィトウは言う。「予想外の方針や、赤十字の補助的任務についての誤解が原因で、国の諸機関から受け入れ難い要求を突きつけられることもありますが、それによって赤十字運動の基本原則が脅かされることがあってはなりません」

不安定な時代

そもそも経済状況の厳しい時代において、弱い立場の移民集団の援助を増強しようとするのは、本当に困難である。弁護士兼ボランティアとしてニコシア支部を運営するアンドリ・アグロティス（Andri Agrotis）は、次のように話す。「経済的危機状況のもとでは、人々は不安な気持ちになります」「中には、今後も移民を受け入れるということは、新しい人々を受け入れ続けなければ国家は回復できないということではないか、と考える人もいるのです」

キプロス赤十字社のボランティア、レアス・コントスは、2012 年の財政危機により大きな打撃を被ったニコシアの住民に、毎日配達を行う。彼が尋ねる人たちの多くは、高齢者や失業者、あるいは生活費が稼げず、借金の返済も充当できない仕事についている人々だ。（写真：©Malcolm Lucard/IFRC）

キプロス赤十字社は、移民を保護し、支援を保証することで、立場の弱い人々の声に応えてきた。“より幅広く理解され、社会的な多様性を受け入れる“という義務を果たす一方で、コフィノウ村、ラルナカ地方、パフォス市の3つの自治組織内の亡命希望者に対し、一時収容施設での奉仕の申し出（例えば家族の安否確認のような）を勧めることで、彼らの要望に応えてきた。

難民や亡命希望者、移民集団について、キプロス赤十字社の代表、アグロティスは次のように言う。「私たちは基本原則に従わなければなりませんが、赤十字社が持つ小規模な資源と能力の範囲内でできることは、どんなことでもやり遂げていると思います」

その責任を果たすために必要なのは、弱い立場の人々の声になろうとすること、そして外国人差別や人種差別、排他的諸政策や社会的排斥の発端となる言動に、きっぱりと反対することだ、とキプロス赤十字社代表のフォティニ・パパドポウロウは言う。

赤十字の運動体がキプロス赤十字社の組織に十分に受け入れられている今、キプロス赤十字社は地方に限らず、ヨーロッパ、そして世界で運動体の意思決定に参加することができる。そしてそれは、運動体への支援活動において、より効果的な役割を果たすことができる、というのがキプロス赤十字社代表の考えだ。

役に立ち続けること

その役割を主に担うのは、若者だ。現在、若者の多くが、将来この国で働き口を見つけることができないという事態に直面している。キプロスにおける最大の問題は“失業”だ、と赤十字社青年部長のバネッサ・キプリアノウは言う。一方で、「ボランティアとして活動することは、キプロス島の人にとって自然なこと」なのだという。「しかし今、若者たちはテーブルの上に食べ物を並べる仕事ですら必要としていますから、ボランティアを頼むというのは難しいのです」

にもかかわらず、多くの若者たちが、キプロス島の仲間や移民を助けるために動員された。また、普通の若者たちのように、多くの人々が、男女平等や若者への権利委譲に対してと同様、世界的な問題（例えば気候変動の影響を和らげること）に情熱を燃やしている。

「私たちは、今すぐに、青少年の意欲を掻き立てる新しいプログラムを考え出さなくてはなりません。それも、先人たちが行ってきたことをそのまま踏襲するのではない形で、です」と、キプリアノウは言う。そして、キプロス赤十字社は正しい目標に向かって行動を起こそうとしている、と付け加えた。青年部が各支部と対等に位置づけられ、青年部が実行委員会へ報告するようになるということは、赤十字社の戦略上の決定に対して発言権を持ち、また資金調達にも責任を持つということだ。

経済危機への対応策の中には、創造力に富む楽しいイベントもある。中でも注目したいのは、ロックコンサートによる資金調達イベントで、中心となっているのは若いボランティアたちだ。しかし一方で、ほとんどの赤十字社スタッフやリーダーたちが 50 才以上であることと比べると、やはり赤十字社の人的資源とはギャップがある。だからこそ、パパドポウロウを含む多くの赤十字社の年長世代は、新しい世代の管理者やリーダーを育成するために、より一層努力する必要がある。

「キプロスは、数年前には楽園だったのです」とパパドポウロウは話す。「いずれ再び楽園に戻るでしょう。そして若い世代は、未来を作るにあたって大きな役割を担うことになると思います。一生懸命働き、お互いに助け合い、みんなの役に立つことができるなら、そのときに初めて、この危機を乗り切ることができるでしょう」

（文：Malcolm Lucard。RCRC マガジンの編集者。）

遺体の身元を特定する仕事

パトリシオ・ブストスは 1970 年代、刑務所に入れられていたが、ICRC 代表者の訪問によって命を救われたようなものだ、と話す。現在、彼はチリの法医学部局長として、ICRC からの支援を受けながら、同国の最大の謎の一つを解決するために働いている。その謎とは、同国の数十年にわたる軍事体制の間に姿を消した人々の身に、何が起こったかである。

現在、チリのトップ検視官であるパトリシオ・ブストスは、1970 年代にチリに軍事専制が敷かれていた間、勾留されていた独房に座っている。この部屋の近くでブストスは、仲間の拘留者の多くがたどった処刑、あるいは行方不明という運命に遭わないように助けてくれた、3 人の ICRC 使節員に会った。(写真:©Hector Gonzalez de Cunco/IFRC)

ブストスは、同行する男性が鍵を開けるのに手こずっている隣で、不満をもらすことなく待っている。数秒後、重い鉄製のドアはついに開いて、彼は青い平屋の建物に3面囲われた、テニスコートほどの大きさのコンクリートの中庭へ足を踏み入れる。「ええ、覚えています」彼は静かに言った。

チリ国家に所属する検視官として働くブストスは、ある人がどのように・なぜ・いつ亡くなったのかを政府が知る必要がある場合、もしくは、特定が困難な遺体についてその身元を政府が知る必要がある場合に、最終的な判断を任せられる立場にある。彼が ICRC の支援を得て扱った最も大きな案件の一つは、チリで 1973 年から 1990 年まで続いた軍事体制の間に殺害、処刑、または行方不明になった人々について調べることだ。

この日、およそ 40 年を経て、64 歳のブストスは、自身の痛ましい過去へ戻る旅をしていた。

彼が最後にこの中庭を見たのは 1976 年で、それは今とは全く異なる状況下だった。そのとき、マルクス主義の同調者であった若い医師の彼は、チリの軍事体制に活発に抵抗したとして逮捕された。サンティアゴにある、クアトロ・アラモスと呼ばれるその施設は、チリの秘密警察によって運営される勾留所だった。秘密警察だけが、彼がそこにいることを知っていた。

1976 年に釈放されてから初めてその廊下に戻った彼は、記憶をたどって狭い廊下を行ったり来たりした。それから、“2 番”と書かれているドアの前で立ち止まった。「これは私のいた独房でした」彼はそう言い、ドアの上の四角い窓から中をのぞこうと爪先立ちをした。

その後、廊下の端まで歩いていき、左へ曲がって、白いセラミックのタイル張りで 6 つのシャワーが備え付けられた部屋へ入った。「ここは、囚人が痛めつけられた場所です」と、彼は当たり前であるかのように言った。「ここはまさに、私が暴行を受けた場所なのです」

彼は少しの間、立ち止まった。訪れたい場所は、もう一つあった。それは、クアトロ・アラモスに収容された囚人たちの共有スペースとして使われていた、鉄格子の窓のある四角い部屋だ。囚われの身であったある日、彼は紅白のバッジをしている 3 人の男性に会うために、そこに呼び出された。

その面会と、その後数カ月間にわたる個人的な対話のおかげで、彼は行方不明にならずにすんだのだった。「ここで私は、ICRC の職員と会いました」彼はそう言って、部屋の真ん中に立ち、わずかにコンクリートに反響してはいるものの、依然として単調で控えめなトーンの声で続けた。「ここで私は、彼らに会ったのです」

失踪者

戦車が大統領官邸に侵入し、空軍が同官邸を爆撃した 1973 年 9 月 11 日の出来事の 2 年以上前に、ブストスはクアトロ・アラモスにやってきた。サルバドール・アジェンデ大統領と何十人もの彼の支持者は、その日に亡くなった。その夜、アウグスト・ピノチェト将軍がテレビに登場し、“祖国を守る”という名目で軍部が権力を掌握したと発表した。

反体制派の検挙はすぐに始まり、それは留まることがなかった。10 月 12 日のたった 1 回の出来事で、兵士はカラマの町に住む 26 人の左翼同調者を逮捕し、刑務所に収容して監禁し、外部との接触を絶たせた。8 日後、当局は声明を発表した。その内容は「1 日前、別の刑務所に輸送中のトラックが機械トラブルで止まっている間に、乗っていた逮捕者が逃走を図ろうとしたため、全員が銃殺されました」というものだった。詳細がそれ以上明らかにされることはなかったし、もちろん、彼らの遺体も出てこなかった。

このように、全く見つからない遺体があまりにも多かったため、被害者たちはロス・デサパレシドス（失踪者）と呼ばれるようになった。

何年もの間、カラマと国内の 15 の都市で、最近 1 カ月以内に消えた者の家族は、さらなる情報を求めた。チリが 1990 年に民主制を回復すると、家族たちはついに回答を得ることができた。軍部はカラマの 26 人を含めた 96 人の人々を拷問して、それから処刑したのだった。その悪名高い行為を行った者たちは、「死の部隊」として知られるようになった。

では、遺体はいったいどこにあったのだろうか？

96 人の犠牲者のうちの一人に、ルイス・アルフォンソ・モレノという保安官をしている 30 歳の社会党の活動家がいた。調査員は 2014 年 1 月、彼の家族に電話をかけた。彼らは砂漠で彼の遺体の一部を見つけ、それを彼であると特定した。

彼の家族はサンティアゴの一般墓地で、モレノの葬式を執り行った。彼の遺骨はチリの国旗で覆われた骨壺に入れられ、その隣には 1969 年の結婚式のモノクロ写真が置かれた。

参列者たちの話題にのぼったのは、笑顔と涙がこぼれるようなエピソードばかりだった。ある人がギターを弾き、参列者たちがそれに合わせて彼の好きだった歌を歌った。それによって人々はさらに、生前の彼の姿を思い出した。モレノは、ピノチェト政権による他の犠牲者の遺体がある墓地に埋葬された。

「私たちは希望を失いました」モレノが消息を絶ったとき 3 歳だった、息子のルイス・アルフォンソ・モレノ・ジュニアが言った。「父の受けた刑罰は、免除されることになるだろうと思います。きっと今、彼は同志と一緒にいるのでしょう」

遺体の誤認

アリシア・リラは、軍事政府によって処刑された人々の家族を代表する団体で、長を務めている。
（写真：©Hector Gonzalez de Cunco/IFRC）

モレノの遺体の特定は、チリの国家検視官事務所において、ブストスが現在、長を務める法医学機関（スペイン語で SML）によって行われた。SML は今、紛争と自然災害による被害者の遺体を特定する機関として、高い評価を受けているが、常にそのような立場にあったわけではない。

SML は、ブストスが局長になるわずか数年前まで、ピノチェトと軍事政権が権力を掌握した後に行方不明になった何十人もの人々の遺体を誤認していた。このことは、犠牲者が埋葬された一般墓地の地域の名称をとって、「パティオ 29」と呼ばれている。1994 年から 2002 年の間に、SML はパティオ 29 に葬られた 98 人の遺体を特定して、正式な埋葬のために遺体を家族へ引き渡してきたと主張した。しかし後に、何十ものケースで、SML の特定が誤りであったことが明らかになったのである。

肯定的な特定がなされなかった 1200 の遺体の遺族は、特に憤慨している。「私たちは SML への信用を失いました」と、アリシア・リラは言う。彼女は、軍事政権により処刑されて遺体がまだ見つかっていない人々の遺族を代表するグループで、長を務めている。

当時の SML の局長が辞任したとき、ブストスは厚生省の上官の地位にいたが、局長のポストに応募して選出された。ブストスは直ちに変革を行った。就任 2 日目に、彼はロス・デサパレシドスの遺族の数人に会い、誤認を終息させ、情報へのアクセスを許可し、さらに SML が人道的な方法で遺族に接することを保証するための、より厳しい法を成立させると宣言した。

血液中にある答え

遺族の信用を再構築するための努力は 2007 年になっても続き、チリ政府は、見つかった骨から採取した DNA を行方不明者の家族のものと一致させることができる DNA 採取センターを設立。SML はまた、海外の信頼性のある遺伝子分析研究所の同意を得て、遺体の特定において高い専門性を持つ ICRC と、より協力関係を深めるようになった。

DNA サンプリング技術を用いて、チリの法医学施設が遺体を陽性と特定したため、遺族がルイス・アルフォンソ・モレノの遺体を埋葬している。モレノは 1973 年、軍事政府によって逮捕および殺害された 35 歳の保安官であり社会主義活動家。
（写真：©Hector Gonzalez de Cunco/IFRC）

そして 2 年後、SML は、すでに見つかっているか、あるいは発見されるかもしれ

ない身元不詳の遺体と適合するかどうかを知るために、行方不明者の家族を招待して血液の寄付を募る、最初の公衆向けの運動を開始し、3500 以上のサンプルを集めることに成功した。

ロレーナ・ピザロは、チリに軍事専制が敷かれていた間に行方不明になった拘留者の遺族組織長。（写真：©Hector Gonzalez de Cunco/IFRC）

血液サンプルを集めこと自体は、単純な作業だ。しかし、多くの遺族にとってその過程は、痛ましい記憶を思い起こさせた。行方不明拘留者団体において家族の代表を務めるロレーナ・ピサロは、次のように話す。「遺族は血液サンプルを提供するとき、感情的にならずにはいられません。なぜなら、いつかは愛する人を遺体で見つけることになるだろうと感じるからです」
昨年、SML は「真実と正義のための1滴の血液」と呼ばれる新しいプログラムで、さらなる一歩を踏み出した。そのプログラムは、遺体特定の対象範囲を、ロス・デサパレシドスの関係者だけでなく、家族が軍事政権の犠牲者であったかもしれないと考えるすべての人々にまで広げることを目的としている。

2007 年以降、SML は 138 人の遺体を特定した。それは、現在 138 の家族が、愛する人と再会できるということを意味する。138 人のうち 58 人は、以前に誤った身元の特定が行われていた。

しかし、遺体の特定に成功する一方で、多くの課題が残ったままである。SML が、愛する人を亡くした人の信頼を獲得するためにすべき課題はまだあるが、必要なのは、遺族に血液サンプルを提供してもらうことではない。ロス・デサパレシドスの遺体を見つけることなのである。

軍事体制へのさまざまな調査で明らかにされた記録によると、軍部と秘密警察は遺体を隠すために故意的な細工を施していたのだという。そのうちの一つである悪名高い行動、別名「テレビセットの投げ捨て」では、軍部は証拠を隠蔽するために、遺体を掘り返して移動させていた。こうした“テレビセットのように扱われた遺体”の一部は、秘密の墓地から掘り起こされ、戦闘機に積まれて海へ落とされたのである。

しかし、ひとたび遺体が出てくれば、遺族からの血液サンプルが、身元特定のチャンスを大幅に広げてくれる。ゆえに DNA の採取は重要であるというのは、アルジェリア、ブラジル、チリ、パラグアイ、およびウルグアイを包括する ICRC ブラジリア地域代表団の検視アドバイザー、オルガ・バラガンは言う。しかし、DNA はしょせん、問題解決に必要な一部でしかない。

「遺体の検視をする際は、家族から得られるのと同じくらい多くの情報を得ようと試みます」とバラガンは話す。「目の色、肌、性別、体重および身長、歯科治療の記録、あらゆる手術、移植、または X 線。同地域は近年、検死科学の分野において大きな発展を遂げていますが、それは技術レベルが高いからだけではなく、検視官が全体論的な人道的視野を持って、十分に準備しているからです。だからこそ、彼らはより良い結果を得られるのです」

しかしながら、チリにおける ICRC の検視作業の対象は、ロス・デサパレシドスだけではない。ICRC は、500 人以上の死者が出た 2010 年の地震、および 81 人の受刑者の死を引き起こした 2010 年の刑務所火災においても、SML を支援した。

さらに、ある 2 つの重要な事件において、チリ司法機関が、同国の詩人パブロ・ネルーダおよび元大統領サルバドール・アジェンデの死因を明らかにするために遺体の掘り起こしを命じた後、ICRC は中立的なオブザーバーとして立ち合いを依頼された。チリの検視施設が他の専門家の支援を得て行ったネルーダの遺体の掘り起こしにおいて、ICRC が求められた役割は、掘り起こしが国際的な基準に沿っているか、そして遺族の権利が尊重されているかを保証することだった。

メモカードから DNA サンプルでの保存へ

チリ法医学施設の研究所で、2 人の技術者が、1970 年代に軍事政府によって犠牲となったと考えられる遺体を分析。DNA サンプリング、および遺体の近くで見つかった衣服、遺品などの調査と併せて、この種の詳細な分析は、犯罪が起きてから何年経っても有用である。（写真：©Hector Gonzalez de Cunco/IFRC）

昨年末、ジュネーブに拠点を置くICRC の検視施設は、チリの行方不明者の DNA サンプルを永久に保存するための 4 つの機関の 1 つに定められた。これにより、ICRC の役割は新たな局面を迎えた。ICRC 検視施設団体の局長、モリス・ティドボール・ビンツは次のように話す。

「ICRC はこのとき初めて、将来的な使用、そして人道的な目的を持った遺体の特定のために、DNA サンプルを受け取りました」

第一次世界大戦以来、ICRC は、紛争によって離散した家族を再会させるために個人情報に頼ってきた。100 年前、個人情報はメモカードに集積され、倉庫の書類棚に保存された。その後、個人情報はコンピュータネットワーク上に保存されるようになった。だが一方で、DNA サンプルの保管は前例がない。

行方不明拘留者団体の代表であるピサロにとって、国際機関とのこの取り決めは、チリの行方不明者の家族が1人ではないこと、そして彼らを見つける責任は世界にあるということを示している。「たとえ何百年過ぎても、愛する人々を特定する手段が残っているというのは、私たちにとって希望です」と、彼女は言う。

ザ・タワー

ブストスが行方不明者の謎を解く原動力は、自身の個人的な経験によって深められてきた。始まりは、1975 年 9 月 10 日のことである。彼はサンティアゴの職場を出た直後、3 人の当局の者によって捕えられ、手錠をかけられ、口を押さえつけられ、目隠しをされて、待機していた車に押し込められたのだ。目的地に着くまでの 30 分間、彼らはブストスに暴行し続けたという。こうして連れていかれた場所は、ヴィラ・グリマルディと呼ばれる、秘密警察の主な拷問施設だった。

秘密警察は数カ月もの間ブストスを追っており、彼が8つの偽名を使って活動を続けていた際も、数回ほど、逮捕する一歩手前まで迫っていた。

クーデターが起きた当時、ブストスは左翼政治活動の地下組織であるコンセプシオン大学の医学生施設長をしていたという。クーデターの後、軍事政府は彼を大学から追放した。彼はサンティアゴへ行き、地下組織の抵抗運動に参加して間もなく、逃避している人々を治療する移動型医療チーム長になった。

ヴィラ・グリマルディで、ブストスは衣服を脱がされ、「ラ・パリージャ（焼き網）」と呼ばれる金属コイルのベッドに寝かされた。そして、そこで尋問を受け、電気ショックを与えられたのだ。
彼はそれから、ザ・タワーと呼ばれる、高さ 40 メートルほどの狭い建物へ連れていかれた。そこで彼は、手首と足首を縛られ、ひざの後ろに出ている平行な金属棒に腕を縛られた。これによって、彼の頭は下向きになる。彼は何時間も、この「オウムの止まり木」と呼ばれる耐え難い姿勢でいなければならなかった。

それ以降の 2 カ月、彼は「オウムの止まり木」か「ラ・パリージャ」による拷問を繰り返し強いられた。時には、妻が隣で拷問されることもあったという。彼女は逮捕されるまで歯科医師をしており、ブストスと同様、地下反対組織に属していた。

1975 年 11 月、ブストスはクアトロ・アラモスへ移送された。そこは、秘密警察が政治犯の最終的な運命を決めるまで、拷問から回復させるためにしばしば囚人たちを連れていく場所だった。そこで彼は、同様に逮捕された人権保護の弁護士、ホセ・サラケットに出会った。「彼が生き延びられる可能性は、とても低いと思いました」サラケットは、ブストスの抵抗運動への重要性、およびそれゆえの危険性から考えて、そのように感じたという。

紅白バッジを付けた男性の訪問

次第に、クアトロ・アラモスの存在は隠蔽されるようになった。そのような状況下で、ラテンアメリカの ICRC 代表の役員を務めているセルジオ・ネッシは秘密施設についての情報を入手し、訪問することを決意して、しぶる相手からクアトロ・アラモス訪問の許可を得た。それ以前に、部外者の立ち入りが許可された例はなかった。

ネッシと他の 2 人の ICRC の職員――ロルフ・ジェニーとウィリー・コルテ――は、1975 年 12 月 9 日にクアトロ・アラモスを訪れた。彼らは共有スペースで、ブストスや他の政治犯に会った。

ネッシとジェニーは彼らの名前を登録し、コルテは彼らの傷、特にブストスの傷を調べた。彼は、かろうじて歩くことができるほどひどい傷を負っていた。ICRC 使節団は、拘留者と 90 分ほど過ごし、翌日、ブストスのための薬と他の拘留者のための備品を持って再び訪れた。

しかしながら、最も重要なのは、ICRC が拘留者の存在を知り、保護を要求することができたということだ。1991 年に行われたチリの真実和解委員会に参加したサラケットによれば、「ブストスの名が ICRC によって登録されるとすぐに、彼の命は可能な限り保障されるようになりました」

支払われるべき負債

最終的に、1976 年 12 月、ブストスは刑務所から釈放されて、イタリアへ追放された。そこで彼は、医療に携わりながら生活を再建した。そして、民主制が回復された後の 1991 年にチリへ戻った。そのときまでずっと、彼はネッシに感謝を伝えるため、ヨーロッパで彼を探していた。

「ICRC は、私の命が救われる上で重要な役割を果たしてくれました」と、ブストスは言う。彼はまた、彼の家族や、釈放された後に彼の所在を広めた他の政治犯も信用していた。

現在は記念施設になっているヴィラ・グリマルディを最近訪問した際、彼はザ・タワーの前の階段に座った。「ここに来るのはつらいのですが、来られるようにしなければなりません」彼はそう言って、そこで亡くなった人や行方不明になった人を悼むため、一年に数回、ヴィラ・グリマルディを訪問していると付け加えた。

行方不明者の遺体を特定するとき、静寂のような感覚を感じるとブストスは言う。彼は、遺体が家族に引き渡されるときは、ほとんどいつも式に参加し、当局の高官が詳細に検視結果を説明するのを確認する。しかし、残っている行方不明者のうち、SML がわずか 10%しか特定できていないという事実に、彼の心は痛む。

マルタ・ヴェガは、遺体が見つかることを今も求めている遺族の一人だ。共産党の活動家であった父、ジョンは、彼女が 17 歳だった 1976 年に行方不明になった。「私たちは父がどこにいるのか見当もつきません」と彼女は言う。

ヴェガや彼女の兄弟、およびいとこは、全員 SML に血液を提供している。「もし父の遺体が明日偶然出てきたとしても、すぐに彼を特定するサンプルがあるというのは安心です」と言って、彼女は続けた。「ブストスはよくやってきたと思います。私たちに必要なことや心配なことがあれば、彼はいつも対処してくれます」

SML が決定的な証拠を持って行方不明者の遺体を特定できても、ブストスは遺族に喜びや満足を表したりはしない。「それは人道的な姿勢です」と、彼は言う。「正義のために、国家および SML がしなければならないことです。いまだに支払うべき負債があるということを、私たちは忘れてはならないのです」

（文：Tyler Bridges。ペルーのリマを拠点とするジャーナリスト。）